

## 三人のアイドル

\*この小説はフィクションであり実在する団体・人物とはいっさい関係ありません。

### 第二章 彼女を切れさせないで



私はアイドル。グラビアアイドル。  
「今度のロケ、外房だよ。スケジュール詰まってさ、風邪ひくとやばいから、体調管理ちゃんとしといてね」

眼鏡をかけたマンガ雑誌の編集者が言う。

「こないだ、あげた漢方薬、ちゃんと飲んでるか？」

社長が言う。私はうわのそら。

「今度のカメラの先生さ、結構時間とるんですよ。社長はよくご存じだろうけど」

「冷水摩擦、やってるか？」

「店、変えますか？ もう一軒、いきましようよ」

「お宅、このご時世にけっこう気前いいね」

「あはは、栄子ちゃんはすっごい有望株つすから。クライアントも栄子ちゃん出すっただけで、安心しちゃうのよ。ほんと、ありがたいよね」

「中島、ちゃんと送っとけよ。明るいとこで車なかで打合せなんかするな」

「ほんじゃ。明後日からよろしくね」

言葉が鼓膜の上を滑っていく。私は、マニュアルどおり、「ごちそうさまでした〜」とお辞儀をして、真っ赤になった編集者と、苦虫潰したような顔を崩さない社長が、タクシーに乗り込むのを見送ってから、マネージャーがコイン駐車場から運んできたトヨタの後部座席に乗り込み、窓に頭をもたせかけて、ネオンが走馬灯のように流れていく街の景色を見つめる。車に乗ったら、遠いところを見ること。ストレスをため込むと、眼の周囲や肌に影響が出る。マンションに帰ったら、すぐに睡眠をとること。若い男の子はな、不健康な女になんか見向きもしないんだ。疲れて家に帰ってきて元気づけにオナニーする連中が、疲れた顔した女に癒されるわきゃない。男つてのはな、女に癒されたいんだよ。現実の女は癒してくれないから、クラブアで自分を慰める、

そういうさみしい動物なんだよ。あと二年、さみしい男を慰める役に徹しろ。二年間がんばれば、寒い冬に海岸で水着きてにつこり笑うような仕事から解放させられるんだよ。分かってるな。そのためになのは……。そうか。分かってるな。

自分が選んだ道だ。後悔しやちいけない。それは分かってる。

まりや先輩みたいに、家族を養うためにこの道に飛び込んだ人もいる。

彼氏にふられた悔しさを晴らすために事務所の扉を叩いた人もいる。

動機は人それぞれ。

でも、求められることはひとつ。

仕事。

仕事というのは、やりたいことをやるのではなく、やってほしいことをちゃんとこなすこと。

緊張を失うな。ストレスをためこむな。緊張を楽しめ。

逃げたい。

でも逃げられない。

やめようと思えばやめられる。

我慢できなくてやめていった先輩もいる。

あきこ先輩は、逃げるために結婚という手段を選んだ。

優美先輩は、本格的な女優になりたい、という面目をつくった。そんな先輩たちに、社長は優しい。優しさはときに残酷なもの。

「着いたよ」

運転席の中島さんが、思い切り優しい声をかけてくれる。

「明日は六時に迎えにくるから。がんばってね」

マニュアル通りの優しさ。私は、マニュアル通りの笑顔を返して、車を降りる。

カードを差し込む。部屋の番号をプッシュする。

オートロックのドアが開く。

通りすぎかけて、足をとめ、郵便受けをチェック。

分厚い封筒が差し込まれている。一週間後に発売されるビデオ。

私の初めての女優業。

カウチに座り、ジュースを飲みながら、ビデオを再生する。

だめだ。

こんなビデオ、誰が見るの？

つまんない。

私が出てきた。

つい、身を乗り出す。

やばいよこれ。ブスじゃん。目つき、わるすぎ。

思わず、コンセントを引き抜く。

煮詰まってるな……。

自分でもわかる。煮詰まってる。

初めての女優業。

ディレクターの指示に一生懸命に耳を傾けた。

台本がすり切れるほど読んだ。

鏡の前で、覚えた台本を喋りながら、どんなふうに分居が映るか、研究した。

この結果がこれ？

だめじゃん。

だめだよ、だめだめだめだめだめ！！

水着のシーンがある。

ビデオを見ながら、自分のナニをしごく男の子には、これでいいのかも。でも違う。

私がやりたかったのは、こんなことじゃない！

落ち込んだ……………。

着信音。

ひかるさんかな…………。

「はい…………」

「おう、小池！」

思わず、背筋がのびた。

「俺だ、覚えてるかあ！」

この無遠慮な胴間声。覚えてる。でも、覚えていって言いたくない…………。

「最近、活躍してみたいじゃないかよお」

「え…………は、はい」

「おい、ほんとに覚えてねえのかよ。安西だよ、安西」

「…………あ、もちろんです。はい、覚えてます」

「やっぱなあ。忘れられない一夜を過ごした仲だもんなあ」

ひいた。

覚えていやがった。

三年前。高校二年生のとき。なんのコンパかは分からないけれど、たまたま隣に座った安西から、むりやりキスされた。私は平手打ち食わせ、彼は平謝りに謝ってたけど、ちょうどその瞬間をポラロイドカメラで撮影してた馬鹿がいた。その瞬間だけ、私は微笑んで彼のキスを受けたように映っていたらしい。で、安西。そのポラを見せびらかしては自慢していたという。

グラビアアイドルになってから、何度かあの一件を思い出して、ますます彼が自慢して見せびらかしているのではないかと冷や汗をかいたこともある。忙しくて、忘れることのほうが多かったけど…………。

「え、なんのことかしら？」

私はとぼけるのが精一杯だった。

「んなこたあ、いいんだよ。お前もいま、グラビアアイドルで全国に名前が知られてるんだろ？俺だって、いまさら蒸し返そうなんて思ってやしないよ。そんなことよりさ、お前のマンション、俺の近所なんだろ？」

「え？」

なんで知ってるんだ！　そういえば、この携帯の番号だって、知らないはずだ！　誰がばらした！　高校時代の友達で、いまの携帯の番号知ってるやつといえば…………あいつと、あいつと…………あいつだ！　ばつきやろ！　よりによって、一番教えちゃいけないやつに…………なんてことしてく

れた！

私は錯乱していた。

「俺さあ、お前のマンションの向かいにさ、一階にファミレス入ってるビルあるだろ？ その四階に道場開いたんだよね。賃貸マンションの一室借りてさ。いま生徒募集中だ。学校でヘラヘラしてる連中より、一足早く、社会進出を果たしたってわけよ」

「……………」

「お前、そういえば、こないだのビデオで、格闘技やってたろ？」

はっとなった。そういえば、合気道で大の男をひっくり返す場面があった。

「は、はい……………」

「駄目だよ、あれ。全然、腰が入ってないよ。あんなの、玄人からみりゃ、一発で分かるぜ」

「そうですかあ？」

演技に口出しされて、ムキになるのは私の悪い癖だ。

「でも、ちゃんと合気道の教室に三日間通って、みっちり教わったんですよ。殺陣の人からも褒められたし……………」

「三日？ そんなもんで、ちゃんと身につくわきゃねえだろ？」

「ま、そうですけど……………」

「また、同じような仕事、当然、入ってくるだろ？」

そういえば、今度、パチンコ業界の仕事で、道着を着てポーズをとる撮影の仕事が入りそうだと社長が言っていた。

「ええ、まあ」

わあ、なんでこんな奴に、正直に打ち明けなきゃいけないんだ！

「とにかく、今から来いよ。お前のどこがいけないのか、具体的に説明してやるからさ。いいな！」

ポラ撮られた弱みだ。

ここで怒らせてはいけない。

安西は、私の高校時代の一年先輩だ。とにかく昔から強引な奴だった。私とはとくに面識があったわけでもないのに、同級生を通じてむりやりコンパに誘われた。そこで例の写真が撮された。柔道部のキャプテン。角刈りのずんぐりむつくり。顔はニキビだらけ。すごく筋肉が盛り上がっていて、怒らせて暴れられたら一番始末に終えないようなキャラだった。

だから仕方ない。

早く社長に打ち明けておけばよかったのに……………」

恥ずかしくて言えなかった……………」

しょうがないじゃない。だいたい社長も、顔を合わせたたん、次のスケジュールがどうなってるって話を機関銃のようにまくしたてて、こっちの言うことなんか、聞いてないんだもん。

全部、言い訳だった。

私は、マンションのエントランスの自動ドアの前に立っていた。エントラスの奥のソファに、安西がふんぞり返って待っていた。

「よ〜おおおおおお！！」

ちようどエレベーターでエントランスまで降りてきた夫婦らしき男女が、大声を出した安西と、私を見比べた。

私は、野球帽にサングラスで顔を隠していた。顔の表面の皮膚の下の血管に、体じゅうの血液が集合したような気分だった。

「ほら」

部屋に案内されたとたん、安西は私に四角く畳んだ道着を放ってよこした。

「え？」

「早く着替えろよ。更衣室はちゃんと奥に用意してっからよ」

ドアを開けると、いきなり畳を強いた八畳の部屋だった。その奥に床の間らしいものをしつらえ、「日本男児」と墨書した掛け軸が垂れている。

「あの一！」

私は、道着を抱えたまま、決然と言った。

「なんで着替えなくちゃいけないんですか？」

「あつたりまえだろーが！」

安西は言った。

「これから稽古つけてやるんだぜ。そんなカッコじゃ、やれねえだろうが」

私は、素足に細いジーンズ、トレーナーという恰好だった。

「でも、私、そんなつもりじゃ」

「お前よお」

安西が眉を顰め、恐ろしい顔をつくった。

「ここまで来て、先輩の行為を無にするんかよ？ いいぜ。俺にも考えがあるんだぜ」  
うっ！

髪の毛が逆立つ思いだった。

やっぱりそう来たか……。

どうしよう……。

「早く、着替えろ！」

まさか乱暴はしないだろう……。

結局、私は道着に着替え、素足で畳の上に立って安西と向かい合う羽目になった。

とにかく、ある程度はいうことを聞こう。その上で、宥めすかして、なんとかあのポラを取り返さなければ……。

「はいっ！」

いきなり安西が、私の道着の胸ぐらをつかんだ。一瞬ひるんだ。道着の下はTシャツだったが、彼は道着の袖ごと、私の乳房をつかんだのだ。電流のような痛みが走った。

「なにするんですか！」

と叫ぶより早く、私の体は宙を舞っていた。どすんと腰に重い衝撃が打ち込まれた。

私は、呆然と畳の上に尻餅をつき、いったあくと呻きながら腰をさすっていた。

「甘い！ お前は甘いんだよ！」

「え？」

私は涙目で安西の叱責を聞いた。

「構えたとき、まったく腰が入ってねえんだよ。ビデオと一緒にじゃんか！ そんな構えじゃあつという間に投げ飛ばされるって、玄人からみりやあ分かるんだよ！」

腰のじわじわくる痛み。心にグサリと突き刺さる痛み。たしかにそうだ。あのビデオを見ていて、私がスタント役の男たちをバツバツサとなぎ倒すシーンのリアリティのなさを痛感していた。

でも、なんで安西ごときに言われなきゃならないの？

「立て！ まず、姿勢を教えてやる」

私は腰をさすりながら立ち上がった。

「構えてみる」

私は、彼に向かって、両手をあげて、腰を落とした。

「だめだめだめだめ！」

彼は、私の背後に回り、いきなり両手で腰をつかんだ。

「足の位置は、肩幅。腰はもう一〇センチ落とす。手は……」

彼は私の両腕をつかんだ。

「そう、この位置。で、そんなに胸を……」

いきなり彼は、私の胸を背後からつかんだ。

「きゃっ！」

私は叫び、身を縮こまらせた。

「こら！ 動くな！」

私の筋肉と神経が、すべて硬直した。

「よし、そのまま動くな」

彼は私の目の前に立った。顎を撫でながら、氷のように固まってしまった私のファイティングポーズを眺めまわした。

視線が……私の胸に集中している。そつと視線をおろした。道着の下に着たTシャツの胸元から、谷間が見えてる……。

彼の股間を見た。

盛り上がってる……。

と、いきなり安西のぶさいくな面が、接近してきた。

「はあッ！」

いきなり右腕をつかまれた。私の体が一回転し、背中から落ちた。同時に、重いものが全身に覆いかぶさってきた。

息ができない……。

安西の重い体が、私を四方固めにして抑えつけている。右手が私の肩に回り、左手は股間からゆつと挿入され、お尻に伸びている。そして、彼の分厚い胸板が、私の乳房を圧迫している。

「いいかあ」

安西の臭い息が鼻孔をつく。

「格闘技つてのはな。相手の動きを事前に察知する洞察力が問われるわけよ。いくら、振付師に教えられたとおりのポーズをとっていても、眼が死んでいたら、すぐ見抜かれてしまうぞ。相手の一瞬の動きも見逃すまいとする眼の緊張感が、アクションシーンの緊迫感を演出するんだよ。

違うか？」

そ、そのとおり……。私はまだ、そこまで芝居ができていなかった……。で、でも、なんでこんな奴に……。

う、動けない。どうすればいいの？

突然。ピロピロリッンと、着信音が鳴った。

「あ、俺。俺だよ」

安西が、私の股間を抑えていた左手を、道着の懐に伸ばし、そこから携帯電話を取り出した。稽古中に、なんで道着の懐に携帯を！？

「うん。いるよ……あつたりまえだろ。俺は先輩だぜ。俺に不可能はないんだよ。今どこだよ……うん、うん。すぐそばじゃねえか。早く来いよ。……うん、うん、じゃな」

早く来い？！

こんなところに誰が来るの？

誰かに、こんなの見られたら……。

口を開こうとしたら、また、安西が体重をかけてきた。息がまた詰まった。

だめ……意識が……なくなっていく……。

だめ！

目の前が真っ暗になった。



薄れいく意識。

と、覆いかぶさっていた重量感がふっと薄くなった。

ぼんやりした視界に、体を起こした安西の顔。

彼の手が私の胸元に伸びた。

おそろおそろ……道着の裾をめくり、Tシャツの胸元に手をかけた。

彼は、私のお腹にまたがり、私をまさぐろうとしている。

私の両手は自由。

もう許さない！

「ぎゃあああああああ！！！」

安西の悲鳴で、私は完全に意識を取り戻した。

私は、自由になった右手をのぼし、彼の股間をつかんでいた。掌に、ぷりぷりした肉の塊の感触。

私は、彼の金玉を、握りしめていたのだ。

「や、やめろ！ 古池！ そこは……」

「こんのやろー！」

私は、ますます強く彼の金玉をひねりあげた。

「あ……あ……あ……あ……」

安西は、口をばくばくさせている。

「どけよ！ 重いじゃねえかよー！」

私は思い切り、上半身を起こした。頭を彼の胸元にぶつけた。

安西はあつけなく、仰向けに倒れた。

私は素早く起き上がった。そして、右足を思い切り後ろにはねあげ、彼の開いた股間にぶちあてた。足の甲が、彼の睾丸に命中した。

「ぎゃあああああ！！！」

驚くほど私は冷静だった。

あのときと同じだ。

深夜のテレビ番組で、いきなり水着にさせられ、同じく水着姿の女性タレントとプロレスをやる、と言われたときだ。

私は、くねくねと体を踊らせ、セクシーポーズをつくるその女性タレントの顔に、平手打ちを浴びせた。

恥ずかしさと怒り、一刻も早くこんな馬鹿な撮影から逃れたい。そんな思いで私は逆上していた。そして、逆上すればするほど、私は冷静になる。

うずくまって泣きじゃくるそのタレントを、私は冷たく一瞥した。喧嘩だぜ。お前も本気出せよ。

安西は、両手で股間を抑え、顔を歪めて涙を流し、体を横倒しにして、ぶるぶる震えている。

「立てよ、この野郎！」

私は、その鼻っ面を蹴った。

「うっ！」

安西が呻き、片手で顔を覆った。

「立てって言うてんだろくがよ！」

私は今度は、みぞおちを蹴った。安西は体をますます丸め、必死に私から逃れようとしている。

「偉そうなこといいやがって……なにが、相手の動きを事前に察知する洞察力だよ。情けねえカッコしやがって。要するに、私の胸が見たかったんだろ？ え？」

私は彼の後頭部を蹴った。言葉は興奮していた。ふだん、絶対に言わないような激しく汚い悪口雑言を彼に浴びせながら、私は、彼がガードしきれない、しかも痛烈に打撃を与える急所に、次々と蹴りを浴びせた。

「や、やめてえ！」

ついに安西が叫んだ。

「ごめんなさい。もう、しません！」

「ごめんですむなら、警察はいらねえだろが！」

私は彼の襟首をつかんで引つ張りあげた。彼は、喉首を圧迫する彼の道着の裾を両手でつかんだ。股間ががら開きになった。

私は、その股間に、右足の踵を打ちつけた。

「ぐえっ！」

安西は絶叫した。私は容赦なく、三、四度続けて、踵を打ち込んだ。四度目のキックが安西の金玉に命中したとき、彼はおおきくのけぞらせた。

襟首から手を離すと、彼はうつ伏せに床に伸びた。両手で股間を抑え、眼と口と鼻からさかんに液体を垂れながしている。

「で、写真どこ？」

「……………はい？」

「写真、どこかって聞いているんだよ！」

私は、彼の睾丸の真上のあたりの尻を踏みつけた。これだけで、じゅうぶんな痛みが男性最大の急所に与えられるはずだ。

「きゃー！」

彼は叫び、号泣しはじめた。

「どこだって、聞いているんだよ！」

無事、写真は回収できた。道場の更衣室の奥に、もう一部屋あって、安西の寝室になっていた。枕元にエロビデオや写真集——私のも当然、あった——がちらばったなかに、例のポラ写真もあった。

私は、ポラ写真をこなごなにひきちぎり、灰皿の上で焼却した。

「じゃ、帰る」

私は、ボロ雑巾のように床の上に伸びている安西に、べっと唾をはきかけて、ドアに向かって歩き出した。

「うすす！」

ドアノブに手をかけようとしたとき、ドアのほうから開いた。

三人の男が立っていた。いずれも若い。

「あ、やっぱり〜！」

一人が叫んだ。

「本物だあ。さっすが先輩だ。ちゃんと呼んでくれたんだあ！」

さっき、安西が携帯で話していた連中だ。安西のやつ、私をここに呼ぶからと先輩たちに約束していたのだ。

私は瞬時に安西の企てを理解した。私を寝業で失神させ、こいつら三人と一緒に、どんなことをしようとしたのか。

「ぐっ！」

私は、目の前にいた男の股間を蹴りあげていた。そいつが体を折った。私は、やつの襟首をつかみ、畳の上に投げ飛ばした。

つづいて、やつの右隣にいた男に迫り、両肩を抑えて、膝蹴り。

「ぐほっ！」

男の臭い息がふきかかる。私は二度、三度、つづけさまにやつの金玉を蹴りあげた。男はへなへたと、その場にくずおれた。

「あ、あ、あ……」

残った一人が、じりじりと後ずさった。彼は、倒れた仲間二人と、私の背後で伸びている先輩の無残な姿に、すべてを察知したらしい。

私は逃すはずもなかった。

「おらー！」

左手でそいつの胸ぐらをつかみ、こちらに引き寄せた。同時に、右手でそいつのジーンズの股間をつかんだ。

悲鳴があがった。私はぎゅっと、そいつの金玉をひねりあげてから、膝蹴りを浴びせた。

道場には、四人の男が、うめき声をあげながら、悶絶して転がった。

「どうしました！」

玄関に、小太りの男が顔を見せた。私はすかさずそいつに駆け寄り、金玉を蹴りあげた。そいつは、たぶんこのマンションの管理人だろう。とんだ側杖だが、これも必要な措置だ。

私は芸能人なのだ。この場で、事件をもみ消さなければならぬ。

「……い、いたい……あ！」

管理人は、両手で股間を抑え、玄関にうずくまったまま顔をあげ、それからハツとした表情を見せた。

「あんたは……」

「そだよ。私は……」

私は、管理人の顎を蹴りあげ、仰向けになった彼の股間を踵で踏みつけた。

「このことを喋ってみやがれ！ 今度はお前の金玉、潰しにくるからな！」

それから、踵を返して、四人の男たちに怒鳴った。

「お前らもだ！ 二度と女を抱けない体にしてやる！」

私はあくまでも冷静だった。

今でも、あの措置は間違っていなかったと思っている。

私はやばい写真を取り返した。

安西も、奴の子分三人も、管理人も、あの一件をもらさなかった。

とにかく、強くなることだ。

強くなければ、この業界では生きてはいけない。

私は自信を得た。

今日も私は、胸元を露出させて、カメラの前でポーズをとる。この体、好きな人以外には絶対に触らせはしない。

お前ら、せいぜい私の体見て、自分でしごいてな。

私は、お前らの好きにはならない。私は私の道をいくんだ。